

【海外留学レポート】

フランス留学の6年間

-音楽学専攻の博士課程生として-

Six Years of Study in France: As “Doctorat” in Musicology

公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団公演事業部ライブラリアン 永井 玉藻

NAGAI Tamamo

(Librarian, Tokyo Philharmonic Orchestra)

キーワード：フランス、留学

はじめに

2009年9月から2015年10月まで、私はフランスのパリ第4大学に、音楽学の学生として留学した。音楽に関するあらゆる研究を行う音楽学の分野では、特にクラシック音楽に関する研究・考察が長く行われており、私も大学時代からフランス音楽の研究をしてきた。ドイツやイタリアの作品に比べ、フランスの音楽作品はあまり日本に馴染みがないように思われる方もいるかもしれない。しかし、上田敏や永井荷風といった明治の文豪によって、ドビュッシーなどの音楽が紹介されて以降、フランス音楽も日本で長く親しまれてきた歴史がある。そのフランス音楽を研究する一博士課程生として過ごした約6年間の留学生活について、以下で紹介したい。

留学までの道のり

フランスへは、留学する前にも修士課程の頃から資料の調査などで訪れる機会があった。しかし、大学院の長期休暇を利用しての渡航は、長くても3週間程度が限度だった。前もって慎重に調査のスケジュールを立て、見るべき資料を絞ったとしても、現地の図書館に所蔵される現物を目の前にするとさらに調査する資料が増え、時間切れで帰国せざるを得ないことが多い。また、日本では比較的小数派のフランス音楽研究も、現地では多くの専門家によって行われている。そのため、いつかは現地に年単位で滞在する機会があれば、と思っていた。その気持ちは、修士論文の審査や博士課程の入学試験があるころにはますます強くなっていった。

留学を具体的に考え始めたのは、慶應義塾大学大学院の博士課程に入学した2008年の春である。そ

の時点で行き先はパリ、とは決めていた。その理由は2つある。まず、パリにはフランス国立図書館や国立古文書館があり、研究に必要な資料が豊富にあるため。もうひとつは、オペラ上演やコンサートが頻繁にあり、文化的に極めて豊かな街だからである。そこで、パリで音楽学の博士課程を設置している大学や高等教育機関を調べ、大学院の先生方や国際センターにも相談に乗っていただき、学会でフランス音楽研究者の方々から情報を集めるなどの紆余曲折の末、2009年の5月ごろに、希望していたパリ第4大学の教授とご縁があり、指導を引き受けていただくことになった。この時期に親身になってくださった方々がいなければ、留学などできなかつたろう。

フランスの博士課程に入学する場合、日本のような入学試験はないが、指導教授の受入許諾書や登録書類、また日本の大学院での成績証明書や語学レベルの証明書とその翻訳などが必要となる。これらの書類が受理されると、大学の博士課程事務局から正式な入学許可証が届くことになっていた。手続きは全て自分で行き、必要な書類を全て提出締め切りの6月上旬に送ったが、事務局からは1ヵ月たっても全く音沙汰がなかった。フランスでは、7月中旬から夏の長いバカンスに入るとさまざまな窓口が閉まり、大学への問い合わせも一切返事が来なくなる。入学許可証がなければ在日フランス大使館に学生ビザを申請できないので、毎日胃が痛くなるほど心配した。最終的には、フランスでの指導教授に事情を説明して事務局と話をしていただき、大学がバカンスに入る直前の7月20日に、やっと公印入りの入学許可証を送ってもらうことが出来た。

一方、留学にあたり悩みの種になったのが費用である。留学を思い立ってから、何か奨学金に応募しようと思っていたが、長期間にわたる博士課程の留学をカバーできるような奨学金にはなかなか出会えなかった。日本学生支援機構の長期派遣制度¹を知ったのは偶然で、大学院の国際センターなどに張り出されていた掲示を見たのだと思う。この時には、すでに留学先大学も住む場所も決まっており、返還の義務なく3年間にわたって支援を頂ける長期派遣制度は大変魅力的だった。急いで応募に必要な書類を集め、指導教授に推薦状をお願いし、幸いにも長期派遣留学生に内定したという通知を最終的に手にしたのは、出発を1ヵ月後に控えた8月頭のことだった。

語学に関しては、留学前からフランス語の授業を積極的に受講し、語学学校にも通ってフランス教育省の認定ディプロムを取得していた。しかし、フランスに到着した次の日、指導教授との面談に赴いて、自分がパリの標準的なフランス語に追いついていないことを知らされた。私の指導教授は外国人学生とのやりとりに慣れていたので、分かりやすく、ゆっくりお話し下さっていたのだと思うが、その時の私はまだパリに到着したばかりで、極度に緊張していた時期でもあり、分かるものも分かっていなかったのだろう。6年間のフランス生活でフランス人（で早口）の友人も増え、最終的には国際学会の司会などをやるようになったが、留学の初期には移民局での行政的な手続きや学校の授業登

¹ 現在の制度名は海外留学支援制度（大学院学位取得型）(http://www.jasso.go.jp/ryugaku/tantoha/study_a/long_term_h/index.html)。

録など、生活する上で避けては通れない出来事が多いため、語学は早期からできるに越したことがないだろう。

研究生活

留学先のパリ第4大学は、正式にはパリ・ソルボンヌ大学 (Université Paris-Sorbonne) という名称で、パリに13校あるパリ大学の中でも文学部や哲学部などの文系の専攻を束ねている。主な校舎は5区のヴィクトール・クザン通りにあり、旅行ガイドブックなどで「ソルボンヌ大学」と紹介されることが多い。歴史を感じる立派な建物の中は迷路のように複雑で、中庭には、ルイ13世の宰相を務めたリシュリュー枢機卿の墓がある礼拝堂がある。授業料の支払いや学生証の更新などを行うのは常にこの校舎で、毎年9月の新学年度の始まりには、特設事務局の前に長い列が出来ていた。一方、私の指導教授のオフィスがあったのは、ヴィクトール・クザン通りの校舎から歩いて5分ほどのセルパン通りにあるメゾン・ド・ラ・ルシェルシュで、こちらには前述した博士課程の事務局があり、毎年の学生登録や博士論文公開審査の手続きなどを行なった。この他に、パリ17区のクリニャンクールにもキャンパスがあり、こちらは最近になって出来たコンクリートとガラスの殺風景な校舎だった。

フランスの文系博士課程生も、日本と同様に研究が中心の生活を送る。私がパリ第4大学に在籍していた当時、博士課程生には単位の取得が義務付けられることはなく、在籍2年目の博士論文中間審査を受けることと、定期的な指導教授との面談だけが必須だった（現在は一定の単位の取得義務がある）。そのため、面談と面談のあいだは、基本的に資料調査や学会発表、投稿論文の執筆を繰り返し、博士論文の完成に向けて努力するのみである。

私の研究は、20世紀のフランスで活躍した作曲家、フランシス・プーランク (1899-1963) のオペラ作品を対象としていた。日本ではイタリアやドイツのオペラ作品が親しまれているが、フランスにおいて、オペラは伝統的に国を代表する芸術ジャンルのひとつとされてきた。20世紀前半には、急速に人気は衰えるものの、フランスの作曲家は第2次世界大戦後に、再びオペラ作曲を手がけるようになる。プーランクもその一人で、彼の2作目のオペラ作品《カルメル会修道女の対話》の音楽語法を分析し、プーランクのオペラ書法が、初演時の社会にどのように受け止められたかを明らかにする、というのが研究の目的だった。そのためには、作品に関する膨大な量の一次資料を調査する必要があり、フランス国立図書館の分館のひとつ、オペラ座図書館 (Bibliothèque-musée de l' Opéra) には頻繁に通った。この図書館は、9区にあるパリ国立オペラ座ガルニエ宮の中にあり、劇場の見学ルートで一部が一般公開されている。この図書館が所蔵しているのは、主にフランス・オペラやバレエに関する資料で、楽譜だけでなく、大道具や衣装のスケッチ、舞台セットの模型などもあるのが興味深い。あまりに頻繁に通い、毎日同じような資料ばかり見ているので、司書の方には顔と名前を覚えられ、席に着くと同時に必要な資料が書庫から出てくるまでになってしまった。

自宅と図書館を行き来する研究生活で最も印象深かったのは、プーランクの姪にあたるロジーヌ・スランジュさんにお会いしたことだった。ロジーヌさんは生前の作曲家に最も近かった親族の一人で、学会で知り合ったフランス人の研究者が、彼女の家を訪問し資料調査をするための仲介役を買って出てくれた。パリの閑静なアパルトマンを訪問すると、お手伝いさんに連れられた上品な老齢のご婦人が現れて歓迎してくださった。ロジーヌさんが所蔵する貴重な資料を撮影したあと、お茶を頂きながら、日本で演奏されるプーランク作品の話やロジーヌさんの思い出話で盛り上がった。最後に皆で撮った写真は宝物である。

理系の博士課程生はラボで他の研究者と毎日顔を合わせるが、文系の博士課程生は、誰とも会わないで一日が終わることもある。幸い、私の周囲にはさまざまな分野の博士課程生がいたので、彼らと話すことが、研究だけでなく精神的にも大きな支えになった。また、国際学会で発表をするようになると、著名な先生方や他国の若手研究者とも知り合いになれる。その縁をきっかけに、学会を共同開催したり、資料調査の力添えを頂いたりすることも出来た。彼らとは今でもやりとりがあり、お互いの研究の進捗状況などを報告し合っている。

日常生活

留学直後の緊張が落ち着くと街を眺める余裕も生まれ、フランス滞在中も3年が過ぎる頃には、日常生活で起こる大概のことには驚かなくなった。郵便物がポストまで届かない、公的書類にあった大幅な間違いを1年後になって訂正される、金曜日の午後に停電すると週明けまで修理の人が来ない、ストライキで公共交通機関が機能しないなど、日本では出会わないだろうトラブルも多々あったが、今となっては微笑ましい思い出である。

生活に慣れて来ると、息抜きにパリの街を散策したり、フランスの地方やヨーロッパの近隣諸国を旅行したりすることもあった。私の場合、地方や他国への旅行は大抵が研究対象の作品上演の観劇か、資料調査のついでだったので、観光らしい観光はあまりしていないが、フランスの地方都市は、パリとは異なる景色や食文化があり、個性を楽しめた。また、ヨーロッパ各地のオペラ劇場でバックステージツアーに参加して、劇場ごとの違いを見学するのは大変興味深かった。

さらに、私の留学生生活を最も彩ってくれたのはバレエとの出会いである。研究の主題がオペラだったので、パリのオペラ座には留学当初から観劇に通っていたが、バレエは日本でも観たことがなかった。しかし、このオペラ座には世界でも屈指のバレエ団がある。せっかく現地にいるのだから、と思い、2009年12月の公演「くるみ割り人形」を見たところ、その素晴らしさに度肝を抜かれた。その後、大学の体育の授業にバレエのクラスがあることを知り、そこに友人が通っていたため、先生の許可を頂いて、初歩から始めることになった。指導して下さったのは、パリに隣接するブローニュ・ビヤンクール市の地方音楽院のバレエクラスを担当し、オペラ座付属のバレエ学校に生徒を何人も入

学させている先生だった。日本では考えられないほど贅沢な指導のバレエクラスに通ったおかげで、専攻が異なる様々な国籍の友人ができ、また研究では決して出会わないようなフランス語の単語を沢山知るようになった。

研究対象のオペラに加えてバレエも観劇するようになったため、パリ・オペラ座には、留学中にかなりの頻度で通った。ヨーロッパのオペラ座やコンサートホールは、日本に比べてチケットの価格帯が広く、オペラ座の場合、一番安い当日販売の立ち見席なら5ユーロで購入することができる。枚数制限があるので、立見席の販売にはいつも行列が出来ているが、トップレベルのオペラやバレエに日常的に触れられるのは、私にとって一番の楽しみだった。

パリ・オペラ座と演奏現場での仕事

オペラ座には、観劇だけでなく研究に直結する面でもお世話になった。もともと、現代社会における文化施設としてのオペラ劇場のありかたに興味を持っていた私は、17世紀からの長い歴史を持つパリ国立オペラ座がどのように運営されているのか、また現代のフランスにおいてどのような位置づけを目指しているのか、実際に勤務する人に直接話を聞きたいと思っていた。劇場にはさまざまな部署があり、オペラ座のように連日公演がある大規模なところはどの部署も多忙を極めるが、ありがたい事に多くの方が私の希望を快く受け入れてくれた。劇場の芸術監督らと年間プログラムの方向性を調整し、シーズンごとの「オペラ座」像を打ち出すドラマトゥルク、演目の歴史的・社会的・文化的背景について、分野を横断する解説文を執筆するプログラムの解説担当、全ての公演の楽譜を準備・整備するライブラリアン、公演の進行を舞台袖で管理する舞台監督など、話を聞かせてくれた一人一人が、オペラ座の運営において自分の仕事かどのように機能するのか、明確な答えと信念を持っていた。

舞台上で観客から直接拍手をもらうのは、才能に溢れるアーティストたちである。一方、ひとつの公演を事故なく成立させるためには、長い時間をかけてさまざまな専門の人々が協力し、準備を整えている。こうした状況は、フランスでも日本でも、また19世紀初頭でも21世紀でもさほど変わっておらず、20世紀初頭のパリ・オペラ座には、2,000人ほどが勤務していたという。しかし、観客が文化創造の現場に携わる人々の仕事を目にするのはあまりない。劇場の仕事に関してあれこれ質問してくる日本人が珍しかったのか、オペラ座の人々はとても親切で、彼らの仕事場や関係者のみの公演リハーサルに入れてくれたり、公演中の舞台袖で実際の作業を見せてくれたりもした。

オペラ座という現場の人々と接して学んだことは、私の進路に少なからず影響を与えた。博士号を取得し日本に帰国してからは、研究を続ける一方で、オペラやバレエの演奏を得意とする東京フィルハーモニー交響楽団に勤務し、ライブラリアンとして日々の公演の準備に当たっている。オーケストラのライブラリアンは、楽譜を読みこなす能力やオーケストラで使用される楽器の演奏経験を有するだけでなく、作品や楽譜に関する作曲・音楽学的な知識を持ち、2ヶ国語以上の言語を習得している

ことが欠かせない。学生時代とは比べ物にならないほど多忙になったが、研究と実践を同時に行うのは非常に刺激的で、日々舞台やオーケストラ・ピットで演奏している奏者から経験に基づく知識を直接聞けたり、著名な演奏家や指揮者と仕事を共に出来たりしている。

留学する意味

インターネットのおかげで、世界の図書館が所蔵する貴重な資料を自宅にしながら閲覧することが出来るようになった今日でも、現地でさまざまな人やものと出会いながら、日本とは違う国の生活を肌で感じることで得るものは多い。1週間程度の旅行で見えるものと、外国人として暮らしフランス人と肩を並べて研究に七転八倒する中で見えるものは全く違う。これは私がフランスに留学した6年間で実感した点である。だからこそ、大変なこと、辛いこともあったはずの6年間も、振り返ると良い思い出として懐かしく感じるのだろう。「その場でしか出会えない人、もの」に会いに行くことが、この情報化社会において留学する意味だと感じている。